

■2013年1月12日（土）三連休初日・トークイベント無事開催しました！

※トーク：芹沢俊介さん（社会評論家）×三浦淳子監督

芹沢俊介さんは、現代社会の病巣を鋭く読み解く社会評論家  
「さなぎ」パンフレットにも批評をお書き下さいました。



三浦監督の『空とコムローイ〜タイ、コンティップ村の子どもたち〜』『孤独の輪郭』もご覧下さったという芹沢さん。映画館で改めて「さなぎ」を鑑賞され、監督こだわりのディティールの表し方や、特有の「待つ撮影」によって生み出される稀有な映像について、語っていただきました！そこから見えてきた芹沢さんが不登校の根っこにあると考える本来子どものもつ「いのちの自然性」と「学校教育」との関係、＜集団や群れの中で一人になれることの大切さ＞…また、ここのところ騒ぎになっている「体罰問題」にも話がおよびました！

「待つ撮影」が時間や思いを見えるものに…

■芹沢俊介さん

朝のシーンは、まるで演出したかのようなスゴイ場面。刻々と動く時計の針…不登校の子のある家庭では珍しい場面ではないが、あそこまで細部に渡り記録している映像を僕は知らない。あの場合、単なる時間ではなくて、学校という世界が押し付けてくる「何か」が表れていて、それを拒絶したい愛ちゃんの体=いのち。お母さんは愛ちゃんの気持ちもわかる、でも学校に行ってほしい…という両端で揺れながらあの場面は進行している。あの時計、こわいと思った。



■三浦淳子監督

時計は、はじめは撮るつもりはなかったが、愛ちゃんが時計を気にするので、考えてみたら「私たちは何かと時計に迫られていることがあるな」と思って。後で学校に行くようになると時間の進み方が全然違ってきて、そういう細かいところから色々なものが見えてきて面白いと。自分の経験した小学校時代は「ガマンとガンバレ」の時間だった。愛ちゃんもそこに緊張していたのかなと。学びはもっと子どもの自発性を尊重した、驚きとか発見のあるものであってほしい。

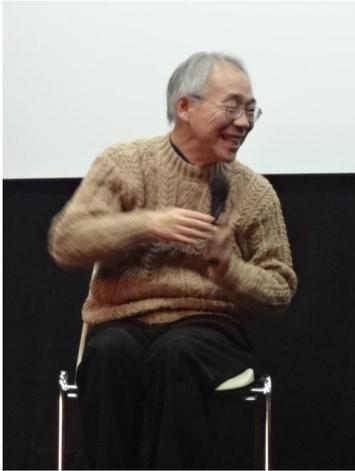


「いのちの自然性」と「学校教育」

■芹沢俊介さん

愛ちゃんを通して「いのちの自然性」を感じた。学校はそれと対立しているように思う。「いのちの自然性」はシステムによりズタズタにされてしまう事がある。それが不登校の根っこになっているのでは、と感じている。集団の中で＜一人になれること＞は「いのちの自然性」が本来求めるもので、そこを通過しないと、社会に自分をうまく馴染ませたり、適応させていくのに難しさが残る。愛ちゃんにとって友達との三人の世界は「自分に戻れるところ」でそれが彼女を「一人として開放させた」。映画はそこを見事に捉えていた。





幕末の1850年前後に日本を訪れていた外国人たちが残した滞在記に「日本は子どもたちの天国だ」「日本の子は自然の子だ」と書かれている。それは環境としての自然ではなく、子どものいのちが命ずることに対して大人たちが、ちょっかいを出さなかったことがその理由と思う。でも、学校制度が入ってきて段々かわっていってしまう・・・それから1955年頃、写真家の土門拳さんが「日本から子どもがいなくなった」と言っている。そして今、50年以上経っているが、この映画「さなぎ」は、現代の子どもの中にも「いのちの自然性」が残っているのかもしれない、と思えるものだった。

### ■三浦淳子監督

学ぶことは人間が育ち豊かになっていくときの重要なもの。学校というシステムは先生が子ども一人ひとりに寄り添いたくても、難しい部分がある。私が学校に行くのがつらかった時、よく助けてくれた先生も、そうでなかった先生もいたが学校という組織では、できる限度というものがあると思う。子どもがおもしろいと思った時にどこまでそれにつきあってあげられるか。つまらないと思った時に子どもに我慢をさせるのではなく、どこまで関心を引き出してあげられるか。その点では、先生は大変責任の重い、能力の必要とされる仕事で、本来、学校は先生を管理するのではなく支えていくべきものだと思う。自然児にとって、不登校は特殊なものではないので、それを認めたいうでの適切な対応が大切ではないか。



### 体罰問題からみる「さなぎ」の現代的価値

「教育がいきすぎた」というよりも、「教育には<いのち>に対して暴力的なものが孕まれていて、その一つとしてああいう事件が起きるんじゃないか。教育や学校は、ときにいのちを脅かすということが無視できない要因になっているのではないか。それに対して映画「さなぎ」は、根本的なところから「ちょっと、ここで少し立ち止まって考えようよ」という深いところからの問いかけがあるように思う。…と三浦監督と語りあいました！

### \*\*\*カフェトーク\*\*\*

劇場トーク後には、恒例のゲスト参加のカフェトークを開催！1Fのカフェ THEO にて、コーヒーやサンドイッチをつまみながら、質問などにお応えしました！なかにはリピーターのお客さまもちらほら。「何度観ても発見があるのでまた来ます！」と好評です。

～ご来場いただいたみなさま、ありがとうございました～

